

ニーチェと古代ギリシャ文化

湯 浅 弘*

Nietzsche and the culture of ancient Greece

Hiroshi YUASA

要 旨

本稿は、いわゆる初期ニーチェのいくつかの言説を手がかりとして、ニーチェ思想と古代ギリシャ文化の関係を探ろうとする試みである。取り扱う主たる対象は彼の処女作『悲劇の誕生』とほぼ同時期に書きのこされた言説で、それぞれ「われわれの教養施設の将来について」「ホメロスの競争」というタイトルを持つ。連続講演の原稿である前者を含めてこれらは公刊された著作ではない。そのためもあって、これらについて論及されることは稀であるが、古代ギリシャ研究を主軸として自らの思想を醸成しつつあった初期ニーチェの世界観を理解するうえで、これらはなお考慮されるべき言説群である。本稿は、こうした点を踏まえてこれらのテキストに検討を加えようとするものである。

Key Words: 文献学, 教養, 天才, 競争, ヘラクレイトス

1 初期ニーチェ思想の在りよう和本稿の問題設定

20世紀前半の代表的なニーチェ研究者であるヤスパースやレーヴィット以来、ニーチェ思想の展開過程は大きく初期・中期・後期の3期に区分して捉えるのが通例となっている。そうした区分によれば、本稿で問題とするいわゆる初期は、ニーチェが一方でバーゼル大学古典文献学教授としての研究教育活動を行いながら、他方『悲劇の誕生』や『反時代的考察』という著作の公刊によって自らの思想を世に問う活動を始めた時期に当たる。それらの公刊著作で表明された言説は、その表現形式、表現内容いずれから見ても当時の古典文献学の枠内には納ま

*教授 哲学・ヨーロッパ近現代思想史

りきれないもので、独自の思想家としてのニーチェの誕生を明かすものであった。

著作のタイトルからも容易に推測されるように、『反時代的考察』の場合その著作の論争的性格は明らかである。その著作においてニーチェは、ショープンハウアーの哲学とワーグナーの音楽芸術に対する絶大なる信頼を基盤として当代のドイツ文化を痛烈に批判し、古典文献学を含めて歴史主義化しつつあった当時の人文諸学に対して哲学と芸術の営為を強く擁護した。

また、ギリシャ悲劇の生成過程をアポロ的なものとディオニュソス的なものという対概念によって描出した『悲劇の誕生』では、ニーチェは古代ギリシャ文化の中核にある悲劇芸術の根源に、狂騒的なオルギアに通じる音楽と陶酔の神ディオニュソスの働きを見るというギリシャ像を提示し、同時にそのギリシャ像の提示を通じて後に芸術家形而上学と呼ばれることになる自らの芸術的・哲学的世界観を表明した。そのギリシャ像は静謐で明るく調和に満ちた古代ギリシャという従来の正統的なギリシャ像を覆す内容を含むものであったし、またその世界観はショープンハウアーやワーグナーの影響を色濃くにじませつつ、悲劇を核とし、芸術家形而上学を基底に持つ古代ギリシャと同様の芸術的文化的再生を強く訴えるものであった。こうしたことから窺えるように、『悲劇の誕生』もまた『反時代的考察』に劣らずきわめて論争的な性格を持つ著作であったのである。

だが、この著作の論争的な性格はその内容のみに関わる問題ではなかった。『悲劇の誕生』公刊直後の周囲の反応に即して言えば、問題の核心はむしろ、地道な実証の作業を省いて、いわばニーチェ個人の哲学的直観に依拠して古代ギリシャという過去の実相を描き出し得るかのような叙述の方法にあったと見るのが妥当である。実際、後にドイツ古典文献学会の中心に位置することになるヴィラモーヴィッツ・メレンドルフの批判などを見れば明らかのように、この著作に対する当時の古典文献学会の冷淡な反応は、文献学の正統的な手続きから大きく逸脱したこの著作の手法に対して向けられたものであった。

こうした批判が、当時の古典文献学会から出たのは当然のことであったし、現在の時点から見ても、その批判には過去を把捉しようとする一つの立場としての筋の通った理があることは疑い得ない。その批判は、過去を把握するためには物的資料であれ言語的資料であれ過去の痕跡を確実に検証しつつ積み上げる以上に有効な方法はないという、それ自体としては至極まっとうな前提に依拠して、ニーチェの方法に非を唱えたのであった。だが、他方、ショープンハウアーとワーグナーの影響下、内心に生じた哲学と芸術への強い希求のゆえに文献学から離反しつつあった当時のニーチェの側に立って見るならば、このような批判に含まれている前提こそが問題であった。

ニーチェが24歳という異例の若さでバーゼル大学に招聘されたのは、人事にまつわる諸々

の他の事情を棚上げして言えば、当時の古典文献学の手法に沿ったニーチェの業績が指導教授リチュルによって極めて高く評価され、強力な推薦を彼から得られたからであった。それらの業績のうち代表的なものを列挙すれば、「ディオゲネス・ラエルティオスの典拠について」「テオグニスの格言詩集の歴史のために」「スイダスの文献史的典拠について」などのタイトルが伝えられており、これらからは古典文献学の学徒としてのニーチェが行っていた地道な実証作業が推測される。

要するに、ニーチェは自らのこうした研究実績を積み上げながら、同時に古典文献学のそうした研究のあり方に対する懐疑をも蓄積していったのである。その経緯は書簡などで窺うことができるが、既に触れているように当時の文献学から離反していった一つの要因はショーペンハウアーとワーグナーによって触発された哲学と芸術への強い傾倒に求められる。だが、それだけが離反の理由なのではない。もう一つの要因として挙げられるのは、古典文献学それ自体がアオグスト・ヴォルフらドイツでの草創期の本来のあり方を見失い、変質しているとの洞察である。ゲーテとも同時代人であるヴォルフらの古典文献学にあっては、古代ギリシャを文化と生との規範と見て、古典的教養の実践的性格を重視する視線が文献学の基本に位置していた。それに対して当代の歴史主義化した文献学においてはそうした視点が失われたというのがニーチェの洞察の眼目であるが、こうした点に注目するならば、当時の文献学からのニーチェの離反は古典文献学の自己批判としての意義を帯びていることが理解されよう。

次の引用は『悲劇の誕生』公刊からほぼ3年が経過した1875年に書かれたもので、長期にわたる古典文献学との葛藤を経た後の手稿であるが、そこには文献学のあるべき姿に関するニーチェの明白な賛意が表明されている。

古代に関する学問としての文献学は、勿論、永久の持続性を持つものではなく、その素材は汲み尽くされる。汲み尽くされないのは、各時代の常に新しい適応、つまり古代に則った自己測定ということである。文献学者に対して、古代を媒介として自己の時代をよりよく理解するという課題が立てられるとすれば、文献学者の課題は永続的なものである。次のことが文献学のアンチノミーなのである。すなわち、古代は事実上常に現在からのみ理解されたのである。——而して、実は古代から現在が理解されるべきではないのか？ より正しく言えば、こうである。すなわち、人は体験されたものに基づいて古代を自分なりに解き明かし、そのようにして獲得された古代に基づいて、体験されたものを自分なりに査定し、評価してきたのだ。⁽¹⁾

現在の生から古代という過去を理解し、また逆にそのようにして認識された過去に照らして現在をよりよく理解する。つまり、過去の認識は不可避免的に現在を起点としたパースペクティブのもとで行われるしかないということ、そしてそうして認識された過去が繰り返し現在のパースペクティブに影響を与えるということ、こうした点を強調するこの引用には20世紀の解釈学が現在と過去との地平融合と名づけたものが先取りされているようにも読める。過去認識の実証主義的な前提に対するニーチェの批判的視点については既に若干触れたが、そのようなニーチェのスタンスの形成には哲学や芸術への傾倒と相俟って、過去認識にまつわる一種の循環、すなわち過去の解釈者と解釈の対象である過去との間にあるこのような解釈学的循環に関するニーチェの洞察も関与していると思われる。

また、文献学の使命として「古代を媒介として自己の時代をよりよく理解するという課題」を提起するこの引用は、同時に初期ニーチェ思想の基本的な在りようを明かしている。古代ギリシャの悲劇を核とする芸術的文化を文化の範例と見て古代ギリシャの解釈へ向かった『悲劇の誕生』と当代のドイツ文化に対する先鋭な批判を提示した『反時代的考察』とは、この引用にあるようにニーチェの自己理解において表裏一体の不可分の関係にあるのだ。当時の歴史主義化した文献学からは離反しつつあったこの時期のニーチェではあるが、この引用にあるような本来の意味においてはニーチェはこの時期なお文献学者であったとすることもできるだろう。

初期ニーチェ思想の基本的構図というこの論点が本稿の主題と強い関連を持つことは言うまでもない。だが、この問題についてはここまで論及してきたニーチェの名著を題材として既に何度か論じたことがある。初期ニーチェ思想の基本的構図に関する筆者の理解は現在でも大きく変化してはいないため、それらを参照していただければ幸いである⁽²⁾。それらの拙論との関係で言えば、公刊されていない手稿を素材としてニーチェと古代ギリシャ文化の関係を主題とする本稿はそれらの補遺にあたる。このような事情のためそれらの論文と内容上の若干の重複が避けられないかもしれないが、手稿を手がかりとしてニーチェの古代ギリシャ理解に新しい照明が当てられればと思う。

2 「われわれの教養施設の将来について」の所論

『悲劇の誕生』は1872年1月に公刊されたが、同じ年の1月から3月にかけてニーチェは「われわれの教養施設の将来について」という5回にわたる連続講演をしている。バーゼル大学の同僚である歴史家ブルクハルトも聞いたと伝えられるこの講演は、当時のドイツの教育の現

状、特にギムナジウムと大学における教育、及びそこでの現在の文献学の役割に対する痛烈な批判に貫かれている。が、そこには同時に古典的教養の故郷としての古代ギリシャへの言及もなされており、この講演が前節で確認した初期ニーチェの基本的構図の枠内でのものと確認できる。まずは、全体の骨格と論旨を通覧しておきたい。

この講演は、老哲学者と長年のその弟子との対話を学生時代のニーチェとその友人が偶然傍らで聞く機会を得て、その対話を思い起こしながら講演者であるニーチェがその内容を物語るという設定になっている。だが、無論これはフィクションである。4人の登場人物がいるが、4人の間で意見の対立があることはほとんど無く、あまり語ることはないニーチェとその友人も含めてショーペンハウアーを思わせる老哲学者を中心に4人はほぼ似たような見解を抱いている者として描かれている。この点では、対話という設定と言っても、意見の衝突によって論理展開してゆくプラトンの対話篇のようなものではない。そのため、基本的にはどの人物の発言も当時のニーチェの考えを表すと解される。

まず問題にされるのがドイツの教育の現状であるが、それは一言で言えば教育の大衆化に伴う教養の拡散と質の低下によって特徴付けられている。ドイツの教育は、いまや国家と似非教養とも言うべきジャーナリズムに先導され、実利的人間の育成を主眼とするものになってしまった。無論、ギムナジウムでは古典的知識の教育はなされているが、断片化した知識の伝達でしかない場合が多く、真に教養ある人間の育成にはつながっていない。それは教師の側で言えば、教師自身が断片化した知識を持つ専門家でしかないことによるし、学生の側について言えば、母国語の厳格な訓練を受けることも無く、年齢不相応にも個性や自主性を重んじるといふまやかしの教育しか与えられてないことによる等々、大学も含めて教育の大衆化に伴う憂うべき現状が痛罵されている。

こうした議論は、時と場所と局面を種々様々に変えて現代にまで持ち越されている議論であろうが、本稿でこうした大衆社会論の教育版に深入りすることはできない。あらためて言うまでもなく本稿の問題設定から見て問題にすべきなのは、こうした議論のうちニーチェの古代ギリシャ理解に関わるアスペクトであり、また直接的に古代ギリシャに言及されてはいなくても初期ニーチェ思想の在りように強く関わるアスペクトである。

こうした視点に立ち戻るとき、まず見紛う余地なく確認できるのは、古典文献学に対するニーチェのスタンスである。これは基本的には前節で確認した方向の議論であって、当代の歴史主義化した文献学はギリシャ・ローマに関する歴史的知識を伝えることはできても、真の教養にまで学生を到達させることはできないとする議論である。ニーチェの見立ては、現在の教育現場では、ドイツの古典文献学の草創期にはあったそうした文献学の実践的使命は古代ギリ

シャを文化の範例と見る視線ともども忘れられているという辛辣極まりないものであった。そうした趣旨の代表的な箇所を引用してみよう。

わが偉大なる詩人たち、つまりあの数少ない真に教養あるドイツ人たちの時代のことであるが、そのとき、ギリシャとローマに淵源してそれらの人々を通じて流れてきた古典的精神が偉大なフリードリッヒ・アオグスト・ヴォルフによってギムナジウムに導入された。彼の大胆な企ては、ギムナジウムの新しい姿を提示することに成功した。すなわち、ギムナジウムは今後断じて単なる学問の植物園になってはならず、一層高く高貴な教養のための本来的な聖なる場所でなければならないのであった。

外見上それに必要であると思われた様々な処置のうち大いに重要なものは、持続的成果をおさめながらギムナジウムの近代的形成へとつながった。だが、最も重要なもの、すなわち教師たち自身をこの新しい精神によって清めるということだけが成功しなかった。その結果、ギムナジウムの目標は、そうこうするうちに再び、ヴォルフによって追求されたあの人文主義的教養（Humanitätsbildung）から著しく遠ざかってしまったのだ。⁽³⁾

ヴォルフがギムナジウムに根付かせようとした人文主義的教養にとって代わってこの後ギムナジウムに浸透したのは、「学識と学識者の教養の絶対的重視（die absolute Schätzung der Gelehrsamkeit und der gelehrten Bildung）」である。これは歴史主義化した古典文献学としてニーチェによって批判された当のものに他なるまい。ニーチェは、ヴォルフの企てが失敗した後、ギムナジウムは本人自身がそうした素養しか持たない古典教育の教師によって真の教養を育成する場ではなくなってしまったというのである。

では、ニーチェの言う真の教養とは何かという問いが自ずから浮上することになるが、この講演ではニーチェはこれを「人文主義的教養」「古典的教養 die klassische Bildung」というばかりで、それに明確な規定を与えてはいない。それはニーチェが意図してのことであるようにも解釈できるが、本当にそうかどうかは速断できない。ここでできることは、真の教養にまつわるいくつかの記述からその内容を浮かび上がらせることだけである。

まず指摘できることは、先の引用で「ギリシャとローマ」に淵源する「古典的精神」という表現があったが、この講演において真の教養のありか、真の教養の故郷が明白に古代ギリシャと名指され、その点が繰り返し強調されていることである。しかも、その古代ギリシャにおける教養の実態についてはほとんど論じられることはなく、もっぱらその近づきがたい偉大さが強調されている。ここにはギリシャの世界への崇敬の念を欠いたまま誰でも安易に近づき得る

かのようにギリシャの世界に接近しようとする歴史主義的な文献学への批判が込められているが、同時に真の教養を少数者とのみ結び付けるこの時期のニーチェに特徴的な見解が暗示されてもいる。

輝かしい開悟の瞬間においてヘラス的古代の独自性と近づきがたさを確信し、辛苦に満ちた闘争によってこの確信を自分自身のまえで擁護してきたすべての人々、これらの人々は、このような開悟に至る通路は決して多数の人々には開かれていないということを知っているし、また誰かがいわば職業的の手口によって生計の資を得る目的でギリシャ人たちを日常的な商売道具のように扱ったり、畏怖もなく職人の手でこれらの聖なるものを撫でまわしたりすることを理不尽でまったく品位のないやり方だと見なすのだ。⁽⁴⁾

ここで生硬な訳語で「開悟 (Erleuchtung)」と訳したものが、文脈上、容易には近づきがたいヘラスの世界にある真の教養にあたると解される。これは少数者にのみ到達でき、畏怖と崇敬をもって取り扱われるべき稀なものである。その貴重さの感覚を現今の古典文献学者はもはや持ち合わせていないというのである。ここでやや控えめに言われていることはさらに先鋭化すれば、真の教養の問題を天才と民族の問題に結び付ける「天才の形而上学」⁽⁵⁾となるが、ニーチェは当時であっても既に反時代的なこうした思想を老哲学者に語らせている。

彼ら（教養の大衆化を主導する人々…説明湯浅）は、知性の王国における自然的序列に対して闘っているのだ。彼らは、民衆の無意識のうちから噴出する最高にして最も気高い教養の諸力を破壊しているのだが、この諸力こそは天才の産出とその正しい教育と保護のうちにその母性的な使命を持っているのだ。一民族の真の教養が天才に関して持っている意義と義務を、われわれは母性という比喩に即してのみ理解できるだろう。⁽⁶⁾

この天才論は、例えば他の箇所では「無数の人間は、一見自分たちのためのように見えながら、根本的にはただ若干の人間たちを可能にするためにのみ、教養を得ようと努力し、教養のために働いているのだという教養に関する本来的な秘密」⁽⁷⁾とも語られており、この時期のニーチェにおいては真面目に主張されている事柄である。それぞれの箇所ではこの主張は老哲学者の持論とされているのみで、明示的に古代ギリシャと結び付けられているわけではない。だが、古代ギリシャ世界を真の教養の故郷とするこの講演の論理構成から見れば、偉大な天才たちを生み出した古代ギリシャを念頭においてこの主張がなされていると解される。

また、真の教養の問題を天才と民族の問題と結び付けて捉えるこの視点は、この講演においてはニーチェの視界が基本的にはドイツ文化に限定されていることを物語っている。現今のドイツの現状を手厳しく批判するニーチェではあるが、ドイツ文化本来の精神はむしろギリシャ的教養への強い憧憬によって養われていたとニーチェは見ているのである。注(3)の引用では「わが偉大なる詩人たち、つまりあの数少ない真に教養あるドイツ人たち」と言われていたが、これらの人々は古代ギリシャへの憧憬をいち早く表明したゲーテ、シラー、レッシング、ヴィンケルマンらのことである。そうした人々の時代にはあった古代ギリシャ文化との結び付きが取り戻されない限りは、現今のドイツの教育の現状は変わらない。それがニーチェの主張である。

ギムナジウムの真の革新と純化は、ドイツ精神の深く強力な革新と純化のうちからのみ現れ出るであろう。内奥のドイツの本質とギリシャ的守護神とを真に結び付けている絆は、きわめて神秘的で把握しがたいものではある。だが、ちょうど野蛮さの只中であって確固たる支えを求めると、真正のドイツ精神の高貴なる要求がこのギリシャ的守護神の手を掴もうと渴望しない限り、またこのドイツ精神のうちからギリシャ人に対する燃えつくすような憧憬が現れない限りは、…(中略)…ギムナジウムの古典的教養目標は、投げ所なく虚空をあちらこちらへひらひらと飛び回ることになるだろう。⁽⁸⁾

さて、以上のようにこの講演でニーチェはドイツの教育の現状の改変への希望を古代ギリシャ文化への熱い憧憬の復活に託した。既に言及したようにこの講演は『悲劇の誕生』の上梓直後のことで、古代ギリシャ文化の内実への言及が極めて少ないのもそうした事情のゆえかもしれない。だが、古典文献学教授という役職にありながら論争的な著作『悲劇の誕生』をニーチェに書かせるにいたったショーペンハウアーとワーグナーの影響は、真の教養へ至る方途に関する問題提起の叙述にも現れている。ニーチェは、「哲学と芸術、そしてギリシャ人たちを(大学から…説明湯浅)取り去ってしまえ。それでもなお、君たちはどんな梯子をたよりに教養のほうへ登っていかうというのか？」⁽⁹⁾と書いているのである。

3 「ホメロスの競争」の所論

古典文献学の研究者として研究生生活を始めたニーチェにとってホメロスがごく馴染み深いものであったことはあらためて言うまでもない。1869年のバーゼル大学の就任講演でニーチェ

は「ホメロスと古典文献学」というタイトルでホメロスが実在した一人の人間であったかどうかという周知のテーマを取り上げている。また、『悲劇の誕生』でもホメロスへの言及が見られるが、そこでホメロスはディオニュソス的なものとアポロ的なものとの相克の歴史のうちに位置付けられ、「ホメロスの叙事詩はオリュンポス文化の詩であり、この詩によってオリュンポスの文化は巨人族の闘争のもたらす惨状に対する己が勝利の詩を歌った」⁽¹⁰⁾とされている。「ホメロスの叙事詩」が「オリュンポス文化の詩」であるとは、それが美的仮象を生み出すアポロ的な芸術衝動の産物であるということだが、このようにホメロスの名前はアポロ的なものと結び付けられ、それ以前の「巨人族の闘争のもたらす惨状」という野蛮状態からの離脱を示すものとして特徴付けられているのである。

このようにホメロスは、ニーチェの著述でしばしば言及される対象である。だが、管見によればホメロスの叙事詩それ自体を主題化し詳しく論じた著述はニーチェにはない。「ホメロスの競争」も、そのタイトルからはホメロスの叙事詩を素材として「競争（アゴーン）」を主題化しているかのように誤解されかねないが、実はそうした内容のものではない。その内容は、古代ギリシャにおいて特徴的な「競争」の尊重という現象を分析しようとしたもので、タイトルを説明的に言い換えれば、むしろ「古代ギリシャにおける競争の意義」とでもいったタイトルの方がふさわしいと思われる。

では、なぜ古代ギリシャの「競争」を組上に載せるのに敢えて「ホメロスの」という言葉を加えてタイトルとしたのだろうか？ 未完の遺稿であるため別の可能性がないわけではないが、一番可能性が高いのは、既に触れたようにホメロスを野蛮状態からの離脱の象徴と見る『悲劇の誕生』で提示されたような歴史的構図を前提としてこのタイトルが選ばれたということだと思われる。「ホメロスの競争」は1872年12月という『悲劇の誕生』公刊からさほど遠くない時期に脱稿されたという事情がある上に、実際、「ホメロスの競争」でもアポロ的芸術衝動に導かれている「ホメロスの世界」⁽¹¹⁾と陰惨な野蛮状態である「ホメロスより前の世界」⁽¹²⁾との対照が鮮やかに示されており、そのうちの「ホメロスの世界」における「競争」に論述の大半が費やされているからである。

以上から明らかなように、「ホメロスの競争」が前提とする歴史的構図は基本的には『悲劇の誕生』と同様の構図、すなわち「ホメロスより前の世界」から「ホメロスの世界」へという構図であり、その「ホメロスの世界」と言われる古代ギリシャの文化的世界でこそ「競争」が文化や国家の護持にとって重大な意義を担っていたとされている。だが、より正確に見れば、その構図にはもう一つ別のこと、つまり「ホメロスの世界」の後史への言及も若干なされていると見なければならぬ。手稿末尾で「競争」がギリシャ世界から取り払われた状態を想像す

るようにとの読者への勧めがあり、きわめて簡略にはあれギリシャの文化世界が「競争」を放棄して「ホメロスより前」に逆行してしまった事態としてスパルタやアテネの没落後の世界のことを語られて稿が閉じられているからである。とすれば、「ホメロスの競争」において古代ギリシャ史は、悲惨な闘争状態である「ホメロスより前の世界」、 「競争」を尊重した文化世界としての「ホメロスの世界」、さらには「競争」を再び喪失した「ホメロスより前」と同様の世界という三段階から成ると想定されていると見ることができる。

では、この手稿全体のこのような論理的骨格は何を示しているのだろうか？ まず明らかなのは、「ホメロスの世界」とニーチェが呼ぶ古代ギリシャ文化の盛衰（その生成も含めて）は「競争」の存否と強く連動しているとニーチェが考えていたことである。それほどに「競争」の尊重は古代ギリシャ文化の本質に関わることだというのである。そして、もう一点ニーチェがその歴史的構図をもって提示しようとした論点として「ホメロスより前の世界」と「ホメロスの世界」の連関、つまりその連続性と非連続性という問題があると解釈できる。「競争」を重要な契機として「ホメロスの世界」の文化が栄えたとしても、その「競争」のおおもとにある次元まで遡れば「ホメロスの世界」は「ホメロスより前の世界」と通底している。その点まで含めて「競争」という現象を捉えようとする、敢えて言えば後々のニーチェ哲学の根幹にも関わる重要な視点がこの手稿には認められるのである。以下この二つの論点を中心に論を進めることにしたい。

これら両方の論点にまたがるニーチェの文章をまず引用しよう。これはニーチェがヘシオドスの「この世に二柱の争いの女神（エリス）あり」という一句から始まる『仕事と日々』の写本を解釈した一節である。

アリストテレスをはじめとして全ギリシャの古代（「ホメロスの世界」…説明湯浅）は、怨恨と嫉妬に関してわれわれとは異なった考えを持っており、ヘシオドスと同じように判断するのだ。ヘシオドスは、人間たちをお互い同士の破滅的闘争に導く一方の争いの女神（エリス）を邪悪な神と呼ぶ。そして次に、もう一方の争いの女神（エリス）を良き神と賞賛しているのだが、その神は、対抗心、怨恨、嫉妬という形をとって人間たちを行為へと、ただし破滅的闘争という行為ではなく競争という行為へと刺激するからである。ギリシャ人は嫉妬深い、だがその性質を欠陥とは感じず、恵み深い神性の作用と感じている。われわれとギリシャ人の間の何という倫理的判断の懸隔であろう！（¹³）

この引用文でまず注意を引くのは、ギリシャ人の感受性と「われわれ」近代人の感受性との

大きな違いが指摘されていることである。前節でも触れたように、古代ギリシャには近代人には容易には理解しにくい近寄りかたさがあるという考えをニーチェは強く持っている。それがこの手稿でも強調されており、ここでは嫉妬や怨恨の評価に関してその点が前面に押し出されているのである。近代人の目から見れば、嫉妬や怨恨は邪悪な神としてのエリスにのみふさわしいとしか解釈できないであろうし、実際そうした解釈が多くなされてきたが、ギリシャ人はそうではなかったというわけである。既に触れたように、このニーチェの論述はヘシオドスの写本の注釈の一部だが、ニーチェが引用している写本には良きエリスに関する記述として次のような一節がある。

良きエリスは技劣れる男をも仕事に駆り立てる。かくして財乏しい者は富める者を範とし、遅れまいとして同じように種をまき、木を植え、家をととのえる。隣人は豊かになろうとする隣人と競う。人間たちにとって良きものはこの争いの女神エリスである。陶工は陶工を怨み、大工は大工を怨む。乞食は乞食を嫉み、歌い手は歌い手を嫉む。⁽¹⁴⁾

ニーチェが『仕事と日々』のこの一節を引用しているのは、怨恨や嫉妬に関する上述した感受性は散発的な現象ではなく、「ホメロスの世界」としての古代ギリシャに広く行き渡っていた感受性であることを示すためだと思われる。ニーチェは、いわばこの感受性を基軸にして、投擲や歌における競い合い、政治家同士、詩人同士といった間での、死者をも含めて偉大な先人に追いつこうとする名声への希求、さらには神に対する傲慢（ヒュブリス）等々古代ギリシャ文化に特徴的と思われる現象を分析してゆく。その分析を通じてニーチェが打ち出しているのは、一つは、古代ギリシャ世界において競争が様々な場面で必要不可欠のものと感じられたのは、最終的には国家社会（ポリス）の安寧のためであり、その点で競争する者の利己心は制限され抑制されていたという主張である。例えば、次のように言われている。

幼少の頃からどんなギリシャ人も都市間の競争において自分の都市の繁栄のための一道具にならんとする燃えるような願望を心中に感じていた。この点で彼の利己心は燃え立たされていたが、この点で彼の利己心は抑制され制限されてもいたのだ。古代世界における個人は、自分の目標が一層手近で具体的であったがゆえに一層自由であった。⁽¹⁵⁾

こうした記述に続けては、古代との対比において「自分の都市の繁栄」という身近で具体的な目標ではなく無限の前に立たされている近代人の窮境が言及されているのだが、この点は触

れるにとどめておこう。もう一点ニーチェが古代の競争思想に関して強調していることを指摘すれば、その主張は、競争が成立し続けるために一人だけの卓越する個人という状態は忌避されたというものである。ニーチェは貝殻追放（オストラキスモス）に関連させて次のように書いている。

卓越した個人は、もう一度諸力の角遂が目覚めんがために除き去られる。このような思想は、近代の意味における天才の「孤立性」とは敵対するものであり、その思想の前提には、互いに行動へと駆り立てあいながらも節度の限界を持する少数の天才たちが常に存在するということが事物の自然的秩序であるという考えがある。これこそギリシャの競争思想の核心である。このような思想は独裁制を忌避し、その危険性を恐れる。その思想は、天才に対する防衛手段として——第二の天才を渴望するのだ。⁽¹⁶⁾

さて、以上のように嫉妬や怨恨の心性に由来する競争は、「ホメロスの世界」では節度を持った形でさまざまな局面で有効に機能し、国家社会の繁栄に資するところ大きなものがあつた。古代ギリシャにおける競争思想は、今引用したような競争の維持継続にまで配慮し得るほどに発達していたのであって、記述したように「ホメロスの世界」の文化存立の少なくとも必要条件をなしていた。「ホメロスの競争」はその競争のありようの素描に過ぎないが、そこでのニーチェの主張は凡そこうまとめて差し支えないと思われる。この主張は一方でブルクハルトのギリシャ文化観にも通じるものであり、古代ギリシャ理解それ自体として興味深い主張である。だが、それにとどまらず、ニーチェの哲学者としての思想形成の経緯という観点から見ても、古代ギリシャにおける競争にニーチェがこの時点で着目していたということは注目に値する。例えば、ニーチェにとって特別な哲学者の一人であるヘラクレイトスの思想、すなわち「対立するものの戦いこそあらゆる生成の起源である」といった思想を、「ホメロスの競争」と近い時期に書かれた『ギリシャ人の悲劇時代の哲学』でニーチェはギリシャ的アゴーンの諸現象と関連付けて捉えてもいるからである⁽¹⁷⁾。

では、もう一点さきほど提示しておいた第二の論点に立ち戻れば、「ホメロスの世界」と「ホメロスより前の世界」の連続と不連続の問題は以上の論述の起点にあつたヘシオドスの写本に既に暗示されていたと見ることができる。その写本では二柱の争いの女神を同じ名前で括ることで両者の連続性が示されていると同時に、他方「人もし分別あらば、一方の争いの女神（エリス）を賞賛するとも、他の一柱の争いの女神（エリス）を誹り咎めるだろう。二柱の女神はまったく異なる心性の持ち主だからである」⁽¹⁸⁾とあるように、両者の断絶もまた記されてい

たからである。

ニーチェがこの問題をどう考えていたかを端的に言えば、フロイト流の情動の昇華と同じ筋道で考えていたと言ってよいと思う。ニーチェ思想にはフロイトの深層心理学の知見を先取りするような洞察がまま見られるが、この問題に関する洞察もその一つである。フロイト流に言えば、「ホメロスの世界」の競争は「ホメロスより前の世界」の陰惨な闘争の昇華した形態である。これがニーチェの洞察であるが、この時期のニーチェの用語によってこれを言い換えれば、「ホメロスより前の世界」のなまの情動としての怨恨や嫉妬というディオニュソス的なものの無制約的支配を前提としながら、その情動にアポロ的な美的仮象がかけられたものが競争という「ホメロスの世界」の文化の形式だということになる。実を言えば、こうした洞察はこの手稿の冒頭に人間性理解に関する一般論として掲げられていたものであった。それを引用し、若干のコメントを付すことで本稿のまとめとしたい。

人間性という言葉が口にされる場合、人間を自然から分離し特徴付けるものが存在するという観念が基礎になっている。だが、そのような分離は実際には存在しない。「自然的な」性質と本来「人間的」と呼ばれる性質とは、不可分な形で絡み合っている。人間は、その最も高貴な諸々の最高の力を示す場合でも、徹頭徹尾自然であり、自然の不気味な二重性格を備えている。ひょっとすると、人間の恐ろしい、そして非人間的と見なされている諸能力こそ、あらゆる人間性が感動や行為や業績として生まれてくる唯一の実り豊かな土壌であるかもしれないのだ。⁽¹⁹⁾

この記述の後にギリシャ人の残虐性とその陰惨なまでの発露への論及が始まるのだが、そうした残虐性を起点として文化の形式としての競争を捉えているところにも、後のニーチェ哲学にダイレクトに通じる長大なパースペクティブの確かな生成を窺うことができるのである。

注

ニーチェの遺稿からの引用は、Sämtliche Werke (Kritische Studienausgabe) を使用。K.S.A. と略記。

(1) K.S.A. Bd.83 [62]

(2) 主として『悲劇の誕生』に関して論じたものとしては、以下の通り。拙論『『悲劇の誕生』の思想圏に関する試論』実存思想論集2『実存のパトス』（実存思想協会編，1987）所収。拙論『ディオニュソス的なものの解釈学』実存思想論集9『ニーチェ』（実存思想協会編，1994）所収。拙論『『悲劇の誕生』の身体論的含意』平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書『西洋倫理想史における身

体の問題』(研究代表者熊野純彦, 2004) 所収。『反時代的考察』の歴史主義批判について論じたものとしては、拙論「ニーチェと歴史」倫理学年報 39 (日本倫理学会編, 1990) 所収。

- (3) K.S.A. Bd.1 s.688-s.689
- (4) ebenda. s.700
- (5) ebenda. s.700
- (6) ebenda. s.699
- (7) ebenda. s.665
- (8) ebenda. s.691
- (9) ebenda. s.744
- (10) ebenda. s.73
- (11) ebenda. s.784
- (12) ebenda. s.785
- (13) ebenda. s.787
- (14) ebenda. s.786
- (15) ebenda. s.789-s.790
- (16) ebenda. s.789
- (17) ebenda. s.824-s.826
- (18) ebenda. s.786
- (19) ebenda. s.783